

第五章 浮舟の物語 浮舟、恋の板ばさみに、入水を思う

[第一段 春雨の続く頃、匂宮から手紙が届く]

*雨降り止まで(春の長雨が降り止まず)、日ごろ多くなるころ(日が経つにつれて)、いとど山路思し絶えて(いっそう宇治への山路が断念されて)、わりなく思されければ(兵部卿は遣る瀬無く思われなさって)、「*親のかふこは所狭きものにこそ(親掛かりの身では窮屈だ)」と思すもかたじけなし(とお考えになるのも帝に畏れ多い)。*「雨降り止まで」は春の長雨の時候の晩春三月となったことを示す言い方のようだが、日程に関わる公的な話題ではないからか明示がないので、言い換えでも明示は避けて置く。*「おやのかふこ」は注に<匂宮の心中。明融臨模本、朱合点。『源氏積』は「たらちねの親のかふ蚕の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」(拾遺集恋四、八九五、柿本人麿)を指摘。>とある。この引き歌はウェブ検索すると、万葉集 2991 番の「たらちねの、ははがかふこの、まよごもり、いぶせくもあるか、いもにあはずして」(作者未詳)の方が圧倒的に多くヒットする。この二つの歌は、ほぼ「親のかふ蚕」と「母が飼ふ蚕」の違いだけで、大筋は両歌とも親掛かりで手厚く育てられるのは厳しく管理されるので気が塞ぐ女に会えないから>ということらしい。ただ、万葉集歌の関連サイトでは、この歌の味わいや背景には然して興味が向けられず、この 2991 番歌の万葉仮名表記の、特に<いぶせくもあるか>の部分が「馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿」となっていて、これが戯書のナヅナヅ読みで、「馬声」で<ヒヒ(イ)ーン>、「蜂音」で<(ブ)ウーン>、「石花」はカメノテという貝の別名の<セ>、「蜘蛛」が<クモ>、「荒鹿」が<アラカ→アルカ>、となっている面白さについての指摘が多い。そしてまた、韓国研究者による朝鮮語読みでは、「垂乳根之(たらちねの)」からしてが<白い精液を垂らした男根を出して>となって、この歌の万葉仮名は強壯剤尽くしの春歌であるらしい記事もあって、確かに「たらちねの」や「ちはやぶる」などの枕詞は一般語用の類推が利かないので外国語っぽいなあ、という語感はあるし、そも、日本語が、特に漢字文化に関連しては半島経由での輸入は多そうで、朝鮮語の影響も相当にあると見るのが普通なので、恐らく其等の指摘は的を得ている部分はあるようだ。が、万葉集の寄物陳思の「繭」題詠みには 12-2991 番歌の他に、それこそ柿本人麿呂歌集からとして 11-2495 番歌に「たらつねの母が飼ふ蚕の繭籠もり籠もれる妹を見む由しもがも」という類似歌があって、此方の方は監視されているのが女の方だとはっきり分かるが、歌の大筋は前二歌と変わらないので、これらの歌は基本的には深窓の令嬢への恋心だと、歌集の編集当時から受け止められていたようだ。だから、拾遺集歌でも「繭ごもり」しているのは女なのだろうが、匂宮は其を此処では自分の親王としての堅苦しい立場として言い換えているのだろう。しかし、堅苦しいとは言っても、親王だからこそ、こんな思い切った、向こう見ずな、大胆な、大仕掛けの、女遊びが出来るのであって、他の誰が、大将の女を寝取るなどという大逸れた事が出来るというのか。その破天荒さは、また実に罪深いのだが、此処に至って自由が利かない我が身を嘆いているようでは、とても女の苦悩や大将の迷惑などに気が回りそうもない。

尽きせぬことども書きたまひて(兵部卿は姫に恋しくてならない思いをお書きになって)、

「眺めやるそなたの雲も見えぬまで、空さへ暮るころのわびしさ」(和歌 51-12)

「春雨は 宇治も恋路も 通せんば」(意識 51-12)

*注に<匂宮から浮舟への贈歌。「眺め」「長雨」の懸詞。>とある。「そなたの雲も見えぬまで」は<あなたの気持ち分らなくなるくらいに>に聞こえて、それは寂しさを訴えているのかも知れないが、その不安は大将との仲を疑っているようにも私には見えるが、もし、姫もそう感じたとしたら、不適切な表現ではないのだろうか。また

それに是は、他に何か暗号や、大喜利の言い回しとかにはなっていないのだろうか。何も無いとしたら、三十男が詠むには幼稚な印象を受けるが、またそれだけに、童心こそが色心のような気もするが、この歌の掲載意図は何なんだろう。どうも、よく分からない。

筆にまかせて書き乱りたまへるしも(という贈歌も、筆の勢いに任せて書き流しなさってあったが)、見所あり、をかしげなり(達筆で見事でした)。ことにいと重くなどはあらぬ若き心地に(姫は然して深刻にもならずこの兵部卿の御手紙を読んで)、

「いと*かかる心を思ひもまさりぬべけれど(こうして御手紙を頂けば、兵部卿に靡く気持を強く思いがちだが)、初めより契りたまひしさまも(先に結婚を約束くださった大将も)、さすがに、かれは、なほいとの深う(さすがにあの方はやはりとても思慮深く)、人柄のめでたきなども(人物の立派さなども)、世の中を知りにし初めなればにや(男女の仲を知った初めの人なので)、かかる憂きこと聞きつけて(このような私の不誠実を聞き知って)、思ひ疎みたまひなむ世には(愛想尽かしなさらしたら)、*いかでかあらむ(どうして良いか分からない)。 *「かかる心」は「御」が付いていないので兵部卿が手紙で示した御愛情ではなく、その文面から匂宮に靡く姫の気持なのだろう。 *「いかでかあらむ」は渋谷訳文に<どうして生きていられようか>とある。そのようにも読めそうだが、上に「ことにいと重くなどはあらぬ若き心地に」とある語り口からして、この時点での姫の認識は<困った事態になる→どうして良いか分からない>くらいでないといふ文脈の整合性が取れない。

いつしかと思ひ惑ふ親にも(京への引越しは何時なのだろうと待っている母親も)、思はずに(兵部卿と情を通じていることは、意外で)、心づきなしとこそは(心外な不都合なことと)、もてわづらはれめ(困るだろう)。かく心焦られしたまふ人、はた(こうして私を恋焦がれていらっしゃる兵部卿にしても、また)、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば(とても浮気性でいらっしゃるとよく聞くので)、*かかるほどこそあらめ(今でこそ情熱的でいらっしゃるが、心変わりなさるだろう)。 *「かかるほどこそあらめ」は注に<「こそあらめ」係結び、逆接用法。『完訳』は「熱中している間はともかく、やがて冷めてしまうだろう」と注す。 >とある。「逆接用法」だから読点で下文に続く構文、と読むのか、「やがて冷めてしまうだろう」が省かれた文末、と読むのか、は立場が違うのに、ただ併記してあるという不親切。だが、渋谷校訂は、読点で下文に続けてある。が、私は『完訳』の解釈に従う。

また(それにまた)、かうながらも(今の御好意のままで)、京にも隠し据ゑたまひ(京に隠し住まわせ下さり)、ながらへても思し数まへむにつけては(末永く情人としてお忘れなかったら)、かの上の思さむこと(対の御方が不興にお思いになる、ことも気になる)。

よろづ隠れなき世なりければ(何事も隠し切れないこの世の中だから)、あやしかりし夕暮のしるべばかりにだに(偶々去年の秋の夕暮れに出会った事があっただけでさえ)、かう尋ね出でたまふめり(兵部卿はこうして、この宇治に大将に匿われている私を探し出しなさらしたのだろう)。まして、わががありさまのともかくもあらむを(まして私が宮様に京に匿われることになったとしたら)、聞きたまはぬやうはありなむや(大将がお知りにならないはずはない)」

と思ひたどるに(と考えを進めて行くと)、「*わが心も(兵部卿の思いを受け止めたいという私の考えも)、きずありて(甘いもので)、かの人に疎まれたてまつらむ(大将に見放され申す事が)、

なほいみじかるべし(最も忌避すべきことだ)」と思ひ乱るる折しも(と姫が深く思い悩んでいる、丁度その時に)、かの殿より御使あり(大将から御手紙が届きました)。*「わが心もきずありて」は「ことにいと重くなどはあらぬ若き心地」を、姫は此处で反省した、という文意だろう。「こころ」は<考え方>、「きず」は<欠点→至らなさ→落度>、あたりか。いや、だがしかし、まさか姫は此处まで、大将を裏切っていることに全く気付かなかった、ということではないだろう。兵部卿を偽大将と気付いた時点で、とんでもない謀略と姫は思ったのであり、しかし相手が貴人であってみれば、その場で騒ぎ立てることも出来なかった。が、当初から是が大将への裏切りである事と、その不誠実の罪悪感は姫にはあった。それが普通だ。だから、以降は断固として兵部卿を拒む、という事も出来たし、その遣り方も相当な強硬策に出ることも有り得なくなかった。が、姫は兵部卿の性愛を真正面から受け止めた迷いで、対処方針や対処方法に気持の整理が付かなかった、ようだ。また今、此处に至っても必ずしも、しっかり整理できた、ということでもなく、落ち着いて理屈を考えて事の善悪に一定の結論を得た、くらいのところだろう。とって、いくら経験の乏しい私でも、男女の仲が善悪で収まるものだとは、さすがに思わない。いや、男女の仲だけではなく、およその人間関係、延いては世の中、またその個体の適合判断は、そも善悪で始まるものではない。マ、要するに、姫は薫大将と居た時に、兵部卿と舟宿で戯れた時のように輝いた時があったのか、と思えば泣けてくるみたいな話だ。

[第二段 その同じ頃、薫からも手紙が届く]

これかれと見るもいとうたてあれば(兵部卿の御手紙に続いて大将の御手紙をお読み申すのは品定めに見比べるようではしたないので)、なほ言多かりつるを見つつ(姫はまだ兵部卿の長文を読みながら)、臥したまへれば(臥していられっしやるので)、侍従、右近、見合はせて(侍従と右近は顔を見合わせて)、

「なほ、移りにけり(やはり姫は兵部卿に心移りしたわね)」

など、言はぬやうにて言ふ(などを目配せで言い合います)。

「ことわりぞかし(そりゃそうよ)。殿の御容貌を、たぐひおはしまさじと見しかど(大将殿の御姿を比類の素晴らしさと思ったけど)、*この御ありさまはいみじかりけり(兵部卿の船宿遊びの御姿態は凄くて)。うち乱れたまへる愛敬よ(激しい性愛をなさってましたから)。まろならば(私だったら)、*かばかりの御思ひを見る見る、えかくてあらじ(あんな宮様の御情熱を見て、じっとしていられませんか)。後の宮にも参りて(中宮にもお仕え申して)、常に見たてまつりてむ(いつも御側でお見受け申したい)」*「この御ありさま」の「この」は<姫が今御覧の御手紙の>だから、「おおんありさま」は<兵部卿の御様子>だろうが、侍従は兵部卿の舟遊びに同行している。尤も、侍従の兵部卿最良は時方最良ではありそうだが。*「かばかり」は「うち乱れたまへる愛敬」のことだから、この「御思ひ」は<兵部卿の男根の逞しさ>を指している。是は隠語というより、情交場面の話題に於ける明示だろう。それに、自分の実体験ではない以上、他の具体表現も無い正確な言い方だろうか。となると、右近はこの侍従の「かばかり」の言い方に、時方が侍従に見せたらしい「御思ひ」まで想像したかも知れない。と思えるのが、下にある右近の反論だ。

と言ふ(と侍従は言います)。右近(すると右近は)、

「うしろめたの御心のほどや(下品ね、あなたは)。殿の御ありさまにまさりたまふ人は(大将殿以上の人なんか)、誰れかあらむ(いるもんですか)。*容貌などは知らず(見た目はともかく)、

御心ばへけはひなどよ(御考えや作法が御立派です)。なほ、この御ことは、いと見苦しきわざかな(やはり兵部卿の横恋慕は、とても困ったことですよ)。いかがならせたまはむとすらむ(姫は一体どうなってしまうのだろうか) *「かたちなどはしらず」は、大将の優れた容姿は比類無いとあったばかりだから、是は何も大将の見劣りを言うのではなく、兵部卿の全否定を避けた言い方なのだろう。それでも、薫殿に対して「容貌などは知らず」と女房が言うのは意外だ。

と(などと言い返して)、二人して語らふ(二人で今後のことを相談します)。心一つに思ひしよりは(右近は自分ひとりで秘匿を抱えていたよりは)、虚言もたより出で来にけり(侍従を仲間に出たので、嘘も吐き易くなったのでした)。

後の御文には(暫く後になって御覧になった大将の御手紙には)、

「思ひながら日ごろになること(伺おうとは思ひながら、日が経ってしまいました)。時々は、それよりも驚かいたまはむこそ(時々あなたの方から御手紙を下されると)、思ふさまならめ(嬉しいのですが)。おろかなるにやは(大事に思っています)」

など、端書きに(などとあって、端書に)、

「水まさる遠方の里人いかならむ、晴れぬ長雨にかき暮らすころ (和歌 51-13)

「長雨に どうしているか 気も晴れぬ (意識 51-13)

*注に<薫から浮舟への贈歌。「をち」(宇治にある地名)と「遠方」、「眺め」と「長雨」の懸詞。浮舟の寂しさを思いやる。>とある。「遠方」は、此处では「をちかた」ではなく「をち」と読むらしい。確かに、兵部卿が自分の寂しさを訴えていたのよりは、この歌は姫の寂しさを思い遣っている筋に見える。が、どちらが姫の心に響くのかは私には分からない。まあ、私の感想としては、兵部卿の歌もこの大将の歌も、特に名文句とは思えない。ただ、恋人同士の歌なんて、当人同士が嬉しければそれで良いので、特に気の利いた言い回しや大喜利の機転などは、そも要らないのだろう。それでも、貴族たるもの、気取るのが仕事、というか分相応の教養を示す沽券みたいなものだから、それで魅力や価値の一部分は量られるものではありそうだ。その限りでは、両者とも掛詞を使って思いを和語の波長に乗せているのだから及第点ではあるのだろうか。

常よりも(いつもより)、思ひやりきこゆることまさりてなむ(あなたが恋しいこの時候の空模様です)」

と(と贈歌があって)、*白き色紙にて立文なり(白い便箋で事務的な封書でした)。*御手もこまかにをかしげならねど(御文面も短くて情緒も無いが)、書きざまゆゑゆゑしく見ゆ(書体は学が有りそうに見えます)。宮は、いと多かるを(宮の御文面はとても言葉が多かったが)、小さく結びなしたまへる(小さな結び文にしてあって)、さまざまをかし(それぞれです)。*「しろきしきし」は何度も使われているが、やはり少し妙な言い方だ。「色紙」は、元々は一定の大きさに裁断した染色した紙で、そこから逆に裁断した紙を「しきし」と語用したらしく、「白き色紙」とは長い巻紙ではなく今の便箋のように何枚かの小さい紙に書いた手紙のことらしい。注には<白色の料紙、立文の形式は、恋文には用いない。『集成』は「儀礼

や普通の用件の時の形式」と注す。>とある。*「おおんて」は普通<筆跡>をいうのだろうが、此处では下に「書きさま(書体)」と字の形ないし書式に言及があるので、この「手」は<文面>と取って置く。

「*まづ、かれを(先にあちらの兵部卿への御返事を)、人見ぬほどに(乳母などの居ない内に、お書き下さい)」 *注に<侍従の詞。先に匂宮に返事を書くように勧める。>とある。右近ではなく侍従だと、如何して特定できるのか分からないが後文にでも示されるのだろうか。

と聞こゆ(と侍従は申します)。

「今日は、え聞こゆまじ(今日は何も書けません)」

と恥ぢらひて(と姫は恥らって)、手習に(手習事に、こうお書きなさいます)、

「里の名をわが身に知れば、山城の宇治のわたりぞいとど住み憂き」(和歌 51-14)

「住み難し その名も此処は 宇治と憂し」(意識 51-14)

*注に<浮舟の独詠歌。『細流抄』は「わが庵は都の異しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり」(古今集雑下、九八二、喜撰法師)を指摘。>とある。独詠歌だけに此处に本心が吐露されているということだろうか。私には特に印象的な歌には見えないが、何か含みがあるのだろうか。それが見えない所為か、何気なく見せた姫の純朴さの他に是を此处に示す意図が何かあるとしても、私には分からない。

宮の描きたまへりし絵を(兵部卿宮がお描きになった共寝の絵を)、時々見て泣かれけり(姫は時々見て泣かれていました)。「ながらへてあるまじきことぞ(宮様との仲は、いつまでも続けては行けない)」と、とざまかうざまに思ひなせど(と姫は何処から見てもそう思えるが)、他に絶え籠もりてやみなむは(大将殿が用意する他所に隔離させて関係が途絶えるのは)、いとあはれにおぼゆべし(とても切なく思えるようでした)。

「かき暮らし晴れせぬ峰の雨雲に、浮きて世をふる身をもなさばや」(和歌 51-15)

「浮く身なら いっそなりたい 雨雲に」(意識 51-15)

*この歌は常陸姫から兵部卿への返歌だが、「かき暮らし」「晴れせぬ峰の雨雲」はむしろ薫大将の歌詠みに呼応しているようにも見える。因みに、大将の贈歌は「水まさる遠方の里人いかならむ晴れぬ長雨にかき暮らすころ」(和歌 51-13)であり、匂兵部卿の贈歌は「眺めやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暮るころのわびしさ」(和歌 51-12)であった。だから、歌筋の核の「雲に浮きて世を経る身」という言い方では、しっかり宮に答えてはいるようだ。が、「雲に浮く」は<死んで焼場の煙になる>という意味になるらしく、「身をもなさばや(そうなってしまいたい)」は<死んでしまいたい>だから、宮の「そなたの雲も見えぬ」という問いに対しては最も悲しい返答で、「かき暮らし晴れせぬ(泣き暮らして気が晴れない)」と訴える寂しさすら霞むほどの悲痛な響きだ。世慣れた女が、会えない寂しさに死んでしまいそう、などと言えば、艶な気分で愉快にもなれそうだが、女房姿が甲斐甲斐しく見えた常陸姫の純真さを思えば、嘘でも可愛い。

*混じりなば(紛れたら、もう会えない) *出典参照に「白雲の晴れぬ雲居にまじりなばいづれかそれと君は思はむ」(異本紫明抄所引-出典未詳)とある。如何にも、下敷きが有りそうな言い回しだが、出典未詳では背景が分からない。姫としては<大将に京に隠されたら、もう兵部卿には会えない>という思いが込められていそうだが、その辺は宮が察知出来たかどうかは分からない。

と聞こえたるを(と姫から返歌があったのを)、宮は、よよと泣かれたまふ(兵部卿は見て、声を上げてお泣きになります)。「*さりとも(もう会えないと言ってはいるが)、恋しと思ふらむかし(私を恋しくは思っているらしい)」と思しやるにも(と思ひ遣りなざるにつけても)、もの思ひてみたらむさまのみ面影に見えたまふ(兵部卿は姫が思い沈んでいるばかりの面影をお思いになります)。*「さりとも」は<そうであっても>という逆接の言い方らしい。だとすると、「さり」とは、姫の返信から匂宮は、姫が大将への義理から宮とはもう会えないと言って来ている、と察したことになるだろう。もし、「さりとも」に<こんなにまでも>という感嘆の語用があるなら、「さり」は姫の返信を寂しさの表現と取ったことになるだろうが、下に「もの思ひてみたらむさまのみ面影に見えたまふ」とあることから、姫は宮にもう会えないと言って来ている、という筋で読んで置く。

まめ人は(生真面目な薫大将は)、のどかに見たまひつつ(姫と兵部卿の仲に気付かず、呑気に姫の返事を御覧になって)、「あはれ、いかに眺むらむ(ああ、どんなに寂しがっていることだろう)」と思ひやりて(と思ひ遣って)、いと恋し(姫を恋しがります)。

「つれづれと身を知る雨の小止まねば、袖さへいとどみかさまさりて」(和歌 51-16)

「雨止まず 水かさはただ 増すばかり」(意識 51-16)

*注に<浮舟から薫への返歌。明融臨模本、朱合点。『異本紫明抄』は「数々に思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」(古今集恋四、七〇五、在原業平)。『湖月抄』は「つれづれと長雨にまさる涙川袖のみ濡れて逢ふよしもなし」(古今集恋三、六一七、藤原敏行)を指摘。>とある。「つれづれと」も「身を知る雨」も古歌を踏んでいるのだろう。そのように体裁良くまとめた歌、のように見える。大将が如何にも行儀良くしているので、敢えて格好だけ付けた、のだろうか。そして大将はそういう良識や教養に満足する人、ということだろうか。だとすれば、姫の物足りなさや皮肉が込められた歌のようでもあり、その姫の不満に大将は気付かず、ただ寂しがっていると受け止めるのだろう。「みかさ」は<水かさ>だから、大将が贈歌で「水まさる遠方の里人いかならむ」と問い掛けたことに、きっちり答えている。が、長雨報告を、きっちり答えただけ、だ。

とあるを(と姫の返歌があるのを)、うちも置かず見たまふ(片時も手離さず御覧になります)。

[第三段 匂宮、薫の浮舟を新築邸に移すことを知る]

女宮に物語など聞こえたまひてのついでに(薫大将は妻の女宮に御所のお話しなどお聞かせ申したついでに)、

「なめしともや思さむと(こういう話は無礼にお思いになるかと)、つつましながら(申し上げるのも、気が引けますが)、さすがに(そうは言っても)年経ぬる人のはべるを(長年付き合ってきた女が居まして)、あやしき所に捨て置きて(変な所に住まわせて)、いみじくもの思ふなるが心

苦しさに(寂しがっているのが気懸かりなので)、近う呼び寄せて(近くに呼び寄せて、世話しようか)、と思ひはべる(と申して居ります)。昔より異やうなる心ばへはべりし身にて(私は昔から世間の男とは違った性分でございます)、世の中を、すべて例の人ならで過ぐしてむと思ひはべりしを(一生、変わり者の独身で通そうかと思っておりましたが)、かく見たてまつるにつけて(このようにあなたと結婚申し上げたので)、ひたぶるにも捨てがたければ(意固地に出家も出来ませんので)、ありと人にも知らせざりし人の上さへ(居ると誰にも知らせて来なかった囲い女の身の上も)、心苦しう(放って置いたのでは心苦しく)、罪得ぬべき心地してなむ(罪作りの気がしているのです)」

と、聞こえたまへば(と申しなさると)、

「*いかなること心置くものとも知らぬを(それが如何して私に關係有る話なのか分かりませんが)」 *注に<女二宮の返事。『完訳』は「どんなことに気がねすべきものか分らぬ。嫉妬心はないとする。高貴な女性の常套的な応答」と注す。>とある。夫が私的に用を足す女と大将家の妻としての公然たる自分の立場とが比較対象になる事自体が理解できない、という認識は身分制度を支える価値観としては全く正しく、正論を打っているという点に於いては誰も傷付けない言い方ではありそうだ。尤も是は、その外形の基となる内実としての男女の情を不問に付した上での建前ではあるが、誰しもが建前で成り立っている社会構造に依拠して生活しているのだから、問題があっても解決策が無い時点では、見過ごすというのは有効な方便だ。しかし、世の中には、また人生には、絶対に見過ごせない問題や事態は起こり得る。そういう場合は円満な解決策など無くても、その事態や問題の存在を止めなければ先へ進めない。是が女宮にとってその手の問題なのかどうかは、女宮自身がその手の問題ではないと思ったのだから、取るに足らない問題なのだ。

と、いらへたまふ(と女宮はお応えなさいます)。

「内裏になど(お上には)、悪しざまに聞こし召さする人やはべらむ(このことで、私があなたを蔑ろにしているが如く、悪くお聞かせ申す者が居るか、案じられるのです)。世の人のもの言ひぞ、いとあぢきなくけしからずはべるや(世間の噂はつまらないものですから)。されど、それは(しかしこの女は)、さばかりの数にだにはべるまじ(そういう噂になるほどの身分でもありません)」

など聞こえたまふ(など大将は申しなさいます)。

「造りたる所に渡してむ(新たに作った邸に姫を移そう)」と思し立つに(と薫大将は思い立ちなさるが)、「かかる料なりけり(女を囲うための家だったんだ)」など、はなやかに言ひなす人やあらむなど(などを派手に言い立てる人も居るか)、苦しければ(気兼ねされて)、いと忍びて(極力人目を避けるために)、障子張らすべきことなど(母屋に襖障子を張りめぐらす内装などを)、人しもこそあれ(選りに選って)、この内記が知る人の親(兵部卿側近の内記の妻の親である)、*大蔵大輔なるものに(大蔵大輔の官職にある家司に)、睦ましく心やすきままに(親しく気安いままに)、のたまひつたりければ(言い付けなさいたので)、聞きつぎて(内記が妻を介して事情を聞き知って)、宮には隠れなく聞こえけり(匂宮には大将が近々姫を京に移す予定を筒抜けで申し上げました)。 *「大蔵大輔(おほくらのたいふ)」は大蔵省の正次官だが、一章七段に大内記を「この人は、

かの殿にいと睦ましく仕うまつる家司の婿になむありければ、隠したまふことも聞くなるべし」と紹介してあったので、この人は内記の養父に当たる大将家の家司だ。

「絵師どもなども(襖絵を描く絵師たちも)、御隨身どもの中にある、睦ましき殿人などを選びて(護衛官たちの知人の口の堅い出入りの者を選んで)、さすがにわざとなむせさせたまふ(隠れ家とはいえ趣向を凝らしていらっしゃいます)」

と申すに(と内記が申すと)、いとど思し騒ぎて(兵部卿はますます慌てなさって)、わが御乳母の(御自分の乳母で)、遠き受領の妻にて下る家(遠国の受領の妻として任地へ下向して留守になる家が)、下つ方にあるを(下京にあるのを)、

「いと忍びたる人(ごく内密な女を)、しばし隠いたらむ(しばし隠し置きたい)」

と、語らひたまひければ(と相談なさると)、「いかなる人にかは(どういう女だろう)」と思へど(と御乳母は思ったが)、大事と思したるに(宮様が大事を明かしなされたのが)、かたじけなければ(畏れ多いので)、「さらば(分かりました)」と聞こえけり(と応え申しました)。これをまうけたまひて(この家を準備なされたので)、すこし御心のどめたまふ(匂宮は少し安堵なさいます)。*この月の晦日方に(この三月の末に)、下るべければ(乳母たちは下向する予定なので)、「やがてその日渡さむ(直ぐその日に姫を移そう)」と思し構ふ(と匂宮は算段なさいます)。*「このつきのつごもりがたに」は注に<受領らは三月末方に下向の予定。>とある。「この月」が弥生なのは一段に「雨降り止まで日ごろ多くなるころ」という言い方で明示されている、ということだろうか。とにかく、此处では明示した方が分かり易い。

「かくなむ思ふ(こう思っている)。ゆめゆめ(決して他言するな)」

と言ひやりたまひつつ(と兵部卿は宇治の姫にお知らせなさるも)、おはしまさむことは(お出向きなさることは)、いとわりなくあるうちにも(出来ないでいたが)、ここにも(姫の方でも)、乳母のいとさかしければ(乳母の目があるので)、難かるべきよしを聞こゆ(お迎えが難しい旨を右近が宮にお伝え申します)。

[第四段 浮舟の母、京から宇治に来る]

大将殿は、卯月の十日となむ定めたまへりける(大将殿は姫の移転を四月の十日とお決めなさいました)。「*誘ふ水あらば(誘われれば何処へでも)」とは思はず(と古今集の歌のようには姫は思わず)、いとあやしく(折角のお知らせにも関わらず)、「いかにしなすべき身にかあらむ(どうしたら良いのだろう)」と浮きたる心地のみすれば(と古今集の歌の上句の根無しの浮草の気分のままで)、「*母の御もとにしばし渡りて(母の御側に暫く寄って、ご相談申し)、思ひめぐらすほどあらむ(考えてみたい)」と思せど(とお思いになったが)、*少将の妻(異父妹の左近少将の妻が)、子産むべきほど近くなりぬとて(出産近くになったからと)、修法、読経など、隙なく騒げば(安産祈願の祈祷や読経などで常陸守邸は始終騒がしく)、石山にもえ出で立つまじ(石山詣でに出掛ける準備も出来ないので)、母ぞこち渡りたまへる(母君が山荘にお越しになりました)。*「誘ふ水あらば」は注に<明融臨模本、朱合点。『源氏釈』は「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいな

むとぞ思ふ」(古今集雑下、九三八、小野小町)を指摘。>とある。*「母の御もと」は下文からすると、必ずしも常陸守邸を指すのではなく、折り入って母子で相談できる場所を言っているらしい。*「少将の妻」は注にく左近少将の妻。浮舟の異父妹。昨年八月頃に結婚。この五月頃に出産予定。>とある。

乳母出で来て(乳母が母君を迎え出て)、

「殿より(大将殿から)、人びとの装束なども(女房たちの装束なども)、こまかに思しやりてなむ(手厚く面倒を見て頂いていますので)、いかできよげに何ごとも(何とか立派に御引越しを済ませたい)、と思うたまふれど(とあって居りますが)、乳母が心一つには(私一人では)、あやしくのみぞし出ではべらむかし(至らないこともあるかと、ご相談できて助かります)」

など言ひ騒ぐが(などと言い立てるのが)、心地よげなるを見たまふにも、君は(引越しを祝儀と喜んでいるようだ)と御覧になるにつけても(姫君は)、

「けしからぬことどもの出で来て(兵部卿の手引きで、この大将の用意下だった引越しがなくなるという、大変なことになって)、人笑へならば(物笑いになったら)、誰れも誰れもいかに思はむ(大将もこの人たちもどう思うだろう)。あやにくにのたまふ人(無理を仰る兵部卿は)、はた、八重立つ山に籠もるとも(もし私が幾重も離れた山に隠れ籠もろうとも)、かならず尋ねて(必ず捜し出して)、我も人も*いたづらになりぬべし(私も宮も不幸なまま死んでしまうだろう)。なほ(いろいろあるだろうが、ぜひ)、心やすく隠れなむことを思へと(私と楽しく隠れ住むことを考えてくれと)、今日ものたまへるを(兵部卿は今日もお手紙で仰って来ているが)、いかにせむ(どうしよう)」 *「いたづらになる」は<死んでしまう>という言い方のようだが、人は誰も皆必ず死ぬので、この言い方は一つには曖昧な婉曲表現だろうが、逆に意味をつければ<人生を無駄にしてしまう→無駄死にしてしまう>ということになりそうだ。この期に及んでも迷うのだから、姫はよほど兵部卿に引かれているらしい。それだけに兵部卿は罪深い、是を尊い純真さと言っても何も解決せず、ただただ仕方ない。

と(とと思い悩んで)、心地悪しくて臥したまへり(体調まで悪くして臥せなさいました)。

「などか、かく例ならず(どうしてこんな何時になく)、いたく青み瘦せたまへる(ひどく青褪めていらっしゃるのか)」

と驚きたまふ(と母君は驚きなさいます)。

「日ごろあやしくのみなむ(ここ数日御不調です)。はかなきものも聞こしめさず(少しの御食事もお取なさらず)、悩ましげにせさせたまふ(辛そうでいらっしゃいます)」

と言へば(と乳母が言うと)、「あやしきことかな(変ですね)。もののけなどにやあらむ(物の怪の仕業でしょうか)」と(と言って)、

「*いかなる御心地ぞと思へど(まだ御懐妊ではないらしいと思いましたが)、石山停まりたまひにきかし(石山詣でを中止なさった時は)」 *「いかなる御心地ぞ」は、姫が石山詣でを中止した時の理由を母君が右近から聞いた時の感想らしく、二章七段で右近は「昨夜より穢れさせたまひて」と手紙を書いていたの

で、月経があった→未受精卵排出→未懐妊、と母は認識したのであり、今回は違うのなら、懐妊による変調かと思っただろう。

と言ふも(と言うのも)、かたはらいたければ(姫は恥らって)、伏目なり(伏目になりました)。

[第五段 浮舟、母と尼の話から、入水を思う]

*暮れて月いと明かし(日が暮れると雨もなく、月がとても明るい夜です)。*有明の空を思ひ出づる(先月の二十日過ぎに対岸へ舟渡りした日の有明の空を姫は思い出します)、「涙のいと止めがたきは(涙が溢れて止められないのは)、いとけしからぬ心かな(そんなに罪深い事なのか)」と思ふ(と思います)。 *「暮れて月いと明かし」の「暮れて」は、単に<夜になって>という時間経過だけを示すのではなく、一段に「雨降り止まで、日ごろ多くなるころ」と三月初旬に兵部卿と大将からの手紙が届いて、引越しの日程が決まって来て、それを受けて母君が宇治山荘を訪れた三月中旬に差し掛かった、雨の止んだ夜、という話し運びなのだろう。 *「有明の空」は二月二十日過ぎに対岸に舟渡りした日のことらしい。四章三段に「有明の月澄み昇りて水の面も曇りなきに」とあった。注には<橘の小島での思い出。>とある。今は「月いと明かし」とあるので、三月の十五夜近くなのだろうか。

母君、昔物語などして(母君は乳母と昔話をして)、あなたの尼君呼び出でて(渡り廊下の曹司に住む弁尼を呼び出すと)、

「故姫君の御ありさま(故姉君の生前の御様子は)、心深くおはして(思慮深くいらっしゃって)、*さるべきことも思し入れたりしほどに(妹君の兵部卿との御結婚を、分不相応で苦勞なさるだろうと心配なさって)、目に見ず見ず消え入りたまひにし(見る見る内に消え入りなさいました)」ことなど語る(ということ、弁尼は語ります)。 *「さるべきこと」は、目下の話題に即した故姉君に付いての類似話、という意味だろうか。であれば、常陸姫は大将が用意した京の新居に引越す直前で、しかし何故か体調を悪くして寝込んでいる。それは丁度、兵部卿に源氏六姫との結婚話が持ち上がっているという噂話を故姉君が聞きつけて、妹君の行く末を案じて体調を悪化させた四年前の姉君の晩年に似通う、ということだろうか。つまり、姫は京での暮らしに身分差を思い知らされることになるのではないかという不安を抱いている、というような論旨で、姫の不調を説明するみたい。一応そう読んで置くが、だとしたら、是は語り手の地文にしては余りにも読者に場を読ませ過ぎる文で、弁尼の発言文と読んで置きたい。

「*おはしまさましかば(姉姫が御存命であれば、姉姫が大将殿夫人として)、宮の上などのやうに(兵部卿夫人の妹君のように)、聞こえ通ひたまひて(皆様と親しくお話しなさって)、心細かりし御ありさまどもの(父宮を亡くされて、心細かった御姉妹は)、いとこよなき御幸ひにぞはべらましかし(さぞこの上ない御幸福でいらっしゃったことでしょう)」 *「おはしまさましかば」はくもし姉姫がご存命なら>だが、弁は母君に、姫が故姉君の「形代(身代わり)」として求められている(宿木巻七章四段ほか)と話したはずだし、それは姉君が薫殿の意中の人だったから、という事情も当然に打ち明けていたに違いない。そうでなければ弁が薫殿の意向を母君に取り次ぐ話の説得力がまるで無くなってしまふ。だから、この場の人たちにとって「姉君がご存命なら」は<姉君が大将夫人になっていて>を意味する、はずだ。

と言ふにも(と弁尼が言うのにも)、「*わが娘は異人かは(わが娘は宇治姫姉妹とは違うと言うのか)。思ふやうなる宿世のおはし果てば(願い通りに大将殿の夫人になる宿縁に収まれば)、劣

らじを(同じ王家血筋の女として、宇治姫姉妹に劣ることはない)」など思ひ続けて(と母君は思ひ続けて)、 *「わが娘は異人かは」は、弁が言う「心細かりし御ありさまども」が<宇治姫姉妹>のことで、常陸姫が同じ八宮の血を引く娘でありながら差別されたことに対する反感なのだろう。常陸姫の母としては当然の思いかもしれない。が、弁尼は北の方亡き後の宇治姉妹の母代わりだったのだし、薫殿の姉君への思いも母君に伝えていたのだから、弁が宇治姉妹を特別扱いするのも当然なのだろう。

「世とともに(今まで事あるごとに)、この君につけては(この姫君の身の上に付いては)、ものをのみ思ひ乱れしけしきの(思い悩んでばかりして来た風向きが)、すこしうちゆるびて(少し好転して)、かくて渡りたまひぬべかめれば(こうして大将の新居に引越しなざる運びのようなので)、ここに参り来ること(この山荘に参り来ることは)、かならずしもことさらには(今後は特に)、え思ひ立ちはべらじ(思い立たないでしょう)。かかる対面の折々に(このような対面の機会には)、昔のことも、心のどかに聞こえ承らまほしけれ(昔のこともゆっくりお聞きして置きたいと存じます)」

など語らふ(などと話します)。

「ゆゆしき身とのみ思うたまへしみにしかば(私は隠棲の尼僧姿でございますので)、こまやかに見えたてまつり聞こえさせむも(親しくお会いしてお話し申しますのも)、何かは、つつましくて過ぐしはべりつるを(何かと遠慮されて過ぎて来て居りますが)、うち捨てて(姫君が此処を打ち払って)、渡らせたまひなば(引越しなざると)、いと心細くなむはべるべけれど(とても寂しくなりそうですが)、かかる御住まひは(こうした姫の田舎暮らしは)、心もとなくのみ見たてまつるを(仮初めのものとばかり拝しておりましたので)、うれしくもはべるべかなるかな(喜ばしいことと存じます)。世に知らず重々しくおはしますべかめる殿の御ありさまにて(またとなく重々しくいらっしゃる大将殿の御人柄からして)、かく尋ねきこえさせたまひしも(このように姫を探し求めなされたのも)、おぼろけならじと*聞こえおきはべりにし(特別なこととあなたには申し上げていましたが)、浮きたることにやは(嘘じゃなかった)、はべりける(でしょ)」 *「聞こえおきはべりにし」は注に<『完訳』は「弁は、薫の意向の伝達役であった。彼女は母君に、浮舟の幸運が誰のおかげかと言いたい気持」と注す。>とある。弁にそういう気持ちはあるのかも知れない。ただ、弁と母君は遠縁に当たる。特に親しくはしていなかったようだが、両者共に北の方に縁付く者で、何処か御里の知れた者同士という心安さはある気がする。その飾らない口調が傍目には威圧風に見える、のかもしれない。

など言ふ(と弁は言います)。

「後は知らねど(先の事は分からないが)、ただ今は(今のところは)、かく思し離れぬさまにのたまふにつけても(大将殿がこのようにお見捨てないように仰るにつけても)、ただ御しるべをなむ思ひ出できこゆる(偏にあなたのお導きに拠るものだと思ひ出し申します)。宮の上の(兵部卿夫人の二条院の御方が)、かたじけなくあはれに思したりしも(有難く娘に親身にして下さいましたにも関わらず)、*つつましきことなどの(二条院で御世話になるのをご辞退すべき事が)、おのづからはべりしかば(どうしても出て来ましたので)、*中空に所狭き御身なり(大将殿と兵部卿宮の二人の殿方から求められた板ばさみで姫は身の置き所がない)、と*思ひ嘆きはべりて(と困ったこともございまして)」 *「つつましきこと」は注に<二条院で匂宮が浮舟に言い寄ったこと。>とある。 *

「なかぞら」のどっち付かずは、兵部卿と御方との間のことを言っているようにも見えて紛らわしいが、御方に遠慮して二条院を去ったことは既に「つつまし」と語られている。となると、二条院に姫が隠れ住んだのは、元々大将との縁談に備えてのことだったのだから、この「中空」はく大将と兵部卿の二人の男心の間でどちらとも決めかねた>ということなのだろう。*「思ひ嘆きはべりて」は、現下の切実な事情を知らない母君にしてみればく娘がモテて困る>と自慢しているのだろうが、冗談めかして言った「後は知らねど」が不吉な予言のように此処に響いて、読者には不穏を感じさせる、という作文演出なのだろう。

と言ふ(と母君は言います)。尼君うち笑ひて(尼君は笑って)、

「この宮の(兵部卿宮は)、いと騒がしきまで色におはしますなれば(派手に女遊びをしていらっしやいますので)、心ばせあらむ若き人(御方に尽くす気のある若女房は)、さぶらひにくげになむ(お仕えし難そうに聞いています)。おほかたは(宮様は大体が)、いとめでたき御ありさまなれど(とても素晴らしい御人柄だが)、さる筋のことにて(女癖では)、上のなめしと思さむなむわりなきと(御方が蔑ろにされたとお思いになるのも無理は無いと)、*大輔が娘の語りはべりし(大輔の君の娘が話していました)」 *「たいふがむすめ」は注にく『集成』は「大輔は中の君づきの女房。その娘の右近である。この巻の右近とは別人」と注す。>とある。

と言ふにも(と言うのにも)、「*さりや(そうか、やはり女房でも御方に気がねしているのか)、まして(まして私は御方の義妹だというのに、裏切っているとは)」と、君は聞き臥したまへり(と姫君は弁の話を臥しながら聞いていました)。 *「さりやまして」は注にく浮舟の心中。『集成』は「女房でさえ中の君を憚るのだから、血を分けた妹はまして、と思う」と注す。>とある。

[第六段 浮舟、母と尼の話から、入水を思う]

「あな、むくつけや(全く困ったものですね)。帝の御女を持ちたてまつりたまへる人なれど(大将殿も、その兵部卿宮の義妹にあたる帝の御息女を正妻にしていらっしやる人ですが)、よそよそにて(姫は兵部卿とは関係ないので)、悪しくも善くもあらむは(御方との仲が悪くなるか良くなるかは)、いかがはせむと(どうにも出来ない)、おほけなく思ひなしはべる(畏れながら存じ上げます)。*よからぬことをひき出でたまへらましかば(もし姫が不道德なことを仕出かしなされたなら)、すべて身には悲しくいみじと思ひきこゆとも(どんなに私自身は姫を哀れに大変だろうと思ひ申しても)、また見たてまつらざらまし(御方への義理から、もう姫を庇い立て申せません)」 *「よからぬことを～」は注にく二条院での匂宮との一件を念頭に言う。「ましかば--まし」反実仮想の構文。もし匂宮との関係が生じたら母娘の縁を切るというニュアンス。>とある。確かに、「また見たてまつらざらまし」はくもう姫を立て祀ってはいられないだろう>と突き放すような言い方をしているが、母君は尼君に従姉妹同士の気安さで軽口を叩いているのであり、姫と兵部卿とに間違いが無いことを前提に、大将の世話で京へ引越すお目出度気分を楽しんでいるだけだ。何があっても娘の肩を持つのが母の情であり、ましてこの姫は母君自身が宮様の情を受けた栄光の証であり、毒を食らば皿までくらの意気込みに違いない。と、読者には分かるが、純真な姫は母の言葉を真に受けるかもしれない、とも思わせる舞台設定ではある。

など、言ひ交はすことどもに(などと母君と尼君が話し合っている事柄に)、いとど心肝もつぶれぬ(姫はますます胸が潰れる思いです)。「なほ(やはり)、わが身を失ひてばや(私は死ぬしか

ないだろう)。つひに聞きにくきことは出で来なむ(兵部卿とのことは、いつかは分かる話だ)」
と思ひ続けるに(と思ひ続けていると)、この水の音の恐ろしげに響きて行くを(春の長雨で増水した宇治川の水が凄い勢いで怖いくらいに響いて流れ行くのを)、

「かからぬ流れもありかし(こんなに激しくはない川もあるでしょうに)。世に似ず荒ましき所に(世にも稀な荒々しい所に)、年月を過ぐしたまふを(姫が長く暮らし為さるのを)、あはれと思しぬべきわざになむ(大将が憐れんで、この引越しを御考え下さったのでしょね)」

など、母君したり顔に言ひみたり(と母君は得意顔で言っていました)。

昔よりこの川の早く恐ろしきことを言ひて(昔からこの川の早く恐ろしいことを言ひて)、

「先つころ渡守が孫の童(先だつて渡し舟の船頭の孫の子供が)、棹さし外して落ち入りはべりにける(棹を挿し外して溺れました)。すべていたづらになる人多かる水にはべり(概して、死ぬ人が多い川です)」

と、人びとも言ひあへり(と女房たちも言ひ合っていました)。

君は(姫君は)、

「さても(そのように入水して)、わが身行方も知らずなりなば(私が行方知れずになったら)、誰れも誰れも(誰も彼もが)、あへなくいみじと(堪え難い不幸なことと)、しばしこそ思うたまはめ(暫くは思いなさるだろうが)、ながらへて人笑へに憂きこともあらむは(生き永らえて見下される厭な目に遭うのは)、いつかそのもの思ひの絶えむとする(いつまでもその辛さは終わらないだろう)」

と、思ひかくるには(と思ひ付くと)、障りどころもあるまじく(それで問題が解決するように)、さはやかによろづ思ひなさるれど(さっぱりした気分もするが)、うち返しいと悲し(そんな人生はやはり悲しい)。親のよろづに思ひ言ふありさまを(母親が色々心配して言っている様子を)、寝たるやうにてつくづくと思ひ乱る(寝ているようにして聞いては、姫はほとほと思ひ乱れます)。

[第七段 浮舟の母、帰京す]

悩ましげにて瘦せたまへるを(姫がだいぶ体調が悪そうに瘦せていらっしゃるのを)、乳母にも言ひて(母君は乳母にも注意して)、

「さるべき御祈りなどせさせたまへ(平癒祈願のご祈禱をあげさせなさい)。祭祓などもすべきやう(神社での御祓いも必要です)」

など言ふ(と言います)。*御手洗川に禊せまほしげなるを(姫は御手洗川で禊をしたい恋の悩みなのに)、かくも知らでよろづに言ひ騒ぐ(母君はそうとも知らずに色々口煩く指示をします)。*「みたらしがはにみそぎせまほし」は注に<明融臨模本、朱合点。『源氏積』は「恋せじと御手洗河にせし禊神はうけずもなりにけるかな」(古今集恋一、五〇一、読人しらず)を指摘。>とある。

「人少ななめり(人手も少ないようです)。よくさるべからむあたりを訪ねて(良く人選をして)。今参りはとどめたまへ(新参者は京の新居へ連れて行くのは止めなさい)。*やむごとなき御仲らひは(都での高貴な社交に於いては)、正身こそ(主人当人は)、何事もおいらかに思さめ(何事も大目に見ていらっしゃっても)、好からぬ仲となりぬるあたりは(陰悪な仲となった互いの女房同士では)、わづらはしきこともありぬべし(難しい問題も起こり得ます)。隠し密めて(目立たぬように)、さる心したまへ(心掛けて仕えなさい)」 *「やむごとなき御仲らひ」は大将の母君の入道宮を想定しているような気がするが、「好からぬ仲となりぬるあたり」は女二の宮と姫の、互いの女房同士のことを言っているように見えて、話に筋が通っていないように思える。非常に分かり難い文だ。

など、思ひいたらぬことなく言ひおきて(などと母君は周到に注意して)、

「かしこにわづらひはべる人も(守家で出産を控えている人も)、おぼつかなし(気懸かりなので)」

とて帰るを(と言って帰るのを)、いどもの思はしく(姫は本当は母君に相談申したく)、よろづ心細ければ(何かと心細いので)、「またあひ見でもこそ(もう会うこともなく)、ともかくもなれ(死んでしまうのか)」と思へば(と思えば)、

「心地の悪くはべるにも(体調が悪い時に)、見たてまつらぬが(お会い出来ないのが)、いとおぼつかなくおぼえはべるを(とても不安ですので)、しばしも参り来まほしくこそ(暫く里帰りしたいのですが)」

と慕ふ(と後を追います)。

「さなむ思ひはべれど(私もそれが良いと思いますが)、かしこもいどもの騒がしくはべり(あちらの家は出産準備で落ち着きません)。この人びとも(此処の女房たちも)、はかなきことなどえしやるまじく(引越準備など出来そうもないほど)、狭くなどはべればなむ(手狭ですし)。*武生の国府に移ろひたまふとも(そう御心配なさらずとも、私は仮にあなたが遠い越路にいらっしゃっても)、忍びては参り来なむを(人目を忍んで会いに参りますから)。なほなほしき身のほどは(でも受領身分の私では)、かかる御ためこそ(大将夫人のあなたには)、いとほしくはべれ(役に立たないでしょうが)」 *「武生の国府(たけふのこふ)」は注に<明融臨模本、朱合点。『源氏積』は「道の口 武生のこふに 我はありと 親に申したべ 心あひの風や さきむだちや」(催馬楽、道口)を指摘。>とある。日本古典文学全集の当該項などを頼ると、「みちのくち」は<街道の始発点>で、此処では<越前国>とのこと。「たけふのこふにわれはあり」は<その府中に私は元気である>。「と、おやにまうしたべ」は<とでも、親には置いてくれ>。「こころあひのかぜや、さきむだちや」は<好い女に当たって、幸先が好い>。で、親には「仕事に励んでいる」と言って安心させて、出張役人が越路に着いた気晴らしに女郎遊びに繰り出す時の景気付けの歌らしい。ただ、此処では紫式部自身が父の為時に付いて越路へ下った体験から、仮にあなたが京を遠く離れても、という意味で引用した語句らしく、催馬楽の歌趣は踏んでいないのだろうが、目出度い宴席で歌われる催馬楽を引く事自体が、母君の浮かれ気分を示してはいるのだろう。なお、「武生市」については、福井県越前市のホームページの歴史参照に「越前市は平成17年10月1日に武生市と今立町が合併して誕生しました。それぞれ古い歴史を誇っています。なかでも越前国の中心として国府が置かれたことは市として特記すべきことです。」とある。

など(などと縋る娘が愛しくて)、*うち泣きつつのたまふ(泣きながら誇らしげに仰います)。
*「うち泣きつつのたまふ」は、別れが悲しくて泣いている、のではないだろう。本当に娘が不憫なら、母はこのままでは帰宅できない。姫は少し体調が悪そうだが、事態は概ね良好に推移している、と母は安心したから乳母に後を任せて、むしろ満足げに帰るのだろう。そして、その母の期待を裏切っている事と償えないまま終わる事に姫はいっそう悲しみを深くする、のだろう。